



## 「90後」

たかおく くにえ  
高奥 邦英

●在中国日本大使館 經濟部・一等書記官

近年、目まぐるしい経済成長を続けている中国は、2010年、経済規模で日本を抜き、アメリカに次ぎ世界二位の経済大国になった。一人当たりのGDP、中国内陸部の農村と都市部の格差など考えると、未だ先進国と呼ぶことは出来ないところも多い。しかし、一方で、戦略的外交を積極的に行っている。アフリカ連合（AU）本部ビル（総工費153億円）を中国政府の全額援助で建設するなど、特にアフリカ諸国での影響力拡大を狙っている。さらには、6月15日、中国有人宇宙船「神舟9号」の打ち上げに成功するなど宇宙開発も積極的に拡大している。

政治的には共産党一党独裁を堅持しながらも、

市場経済化を推進し、急速な経済成長を続けている中国。豊かな生活を享受する世代の増加や情報化社会の進展に相まって経済成長一辺倒の方式にもターニングポイントを迎えつつあるのではないだろうか。

今年2012年は「90後」（1990年代生まれ）の大学新卒者がとうとう社会に進出し始める（中国の教育機関では9月入学、7月卒業が多い）。従来の世代と比べ、「先進的、個性的、反抗的、自己中心的」な思考・行動パターンを有していると言われている。「一人っ子政策」のもと1990年代に生まれ育った若年層たちは、物質的に恵まれた環境で生活をおくり、経済成長しか知らない世代である。

### 豆コラム：2012年中国大学就業報告

2012年6月に出版された「2012年中国大学生就業報告」によると、2008年度大学卒業者（高職高専など含む）の卒業から3年後の平均賃金は4,445元（約5万5,600円）で、卒業後半年時点と比べて2.4倍に達することが分かった。また、少しでもいい条件を求めて職場を転々とする風潮があるが、転職が必ずしも賃金上昇につながっていない現状も明らかとなった。同調査によると2008年大卒者の卒業から3年後の平均賃金は、日本の4年制大学にあたる生徒が5,066元、短大・専門学校にあたる生徒が3,823元であった。いわゆる大卒と短大卒の賃金の差異は卒業半年時点では486元だったものの、3年後には2.6倍の1,243元にまで拡大している。

また、「2011年卒業生求職力と求職志向調査報告書」によると、新卒者の希望先は35.6%が国有企業、続いて、外資企業が23.7%、続いて行政機関が19.2%となっている。2000年には外資企業と国有企業とでは賃金の格差が約1.6倍あったが2010年には数%に縮まり、今では国有企業は高い給与、安定した雇用環境などの強みをもって、最も人気のある就職先となっている。



---

従来より、中国では日本と違い転職に対するマイナスイメージがあまりなく、どちらかと言うと、キャリアアップを意味していた（2010年新卒者の半年以内の離職率は36%、特に大学卒業者は24%である）。

さらに、「90後」にとって離職の理由は仕事の内容にはとどまらない。ある民間企業が行ったアンケート結果によると、宿舍のメシがまずい、職場で恋愛ができない、残業したくない、など理由は様々である。

中国政府は経済発展を推し進めるに当たり、その基盤となる人材育成の必要性についても強く認識しており、1999年に「21世紀に向けた教育振興行動計画」を制定した。結果として、1997年にはわずか20校だった中国の私立高等教育機関は、2010年には630校以上に激増し、1990年代後半に1割程度だった大学進学率は、現在は27%に上昇している。卒業生の数で見ると、2000年は100万人だったのが、2011年には600万人を超えるまでになっている。

他方で、大学卒業者の急激な増加は、大学生の就職難という新たな社会問題を引き起こしている（人力資源社会保障部の発表によると、2011年の大学生の半年以内の就職率は78%となっており、60万人程度が就職できていないことを意味する）。

高度人材に対する企業の求人数は大学卒業生の数には及ばず、多くの大学生が定職につくことができないのである。一方、大学進学率の上昇の裏側では、高等教育を受けていない層を主な労働力資源としている労働集約企業における、労働力不足問題を引き起こしている。

このように、中国においては、大学生の就職難とともに、「招工難」とよばれる一般労働者の不足が発生するという、構造的矛盾現象が生じている。

私は中国式で言うと「70後」に属している。若い人たちに対する不満や物足りなさは実感としてよく理解出来る。「今の若い子は…」という決まり文句は日本でもそうだと思うが、どこの国でも言われていることだ。

日本では海外に出たがらない若者が増えていると言うが、海外に留学する中国人は増えており、2011年の留学生は35万人と言われている。北京で生活していても、若者がチングリッシュ（Chinglish：中国人の話す英語）で会話している場面によく出会う。インターネットが発達した社会に育ち、国際感覚のある「90後」はもしかしたら、中国社会において、新人類などと批判的に扱われているのは、実は、旧世代をも覆す真の脅威であると思われるからかもしれない。